

ふるさと納税
わがまち
の逸品

デニム生地は国内生産で7割のシェアを持つ広島県福山市。ふるさと納税の返礼品にもデニム製品をそろえており、中でも地元企業の技術を集めたのが「500年ネクタイ」だ。共同開発した地元5社の創業年数を足すと500年を超えることから名付けられた。色抜きの濃淡の差でバラ柄を表現しているものの派手すぎず、程よいおしゃれ感が人気だ。

インディゴ染め、織布、色抜きなど各工程で高い技術を持つ地元の老舗が連携した。中でも特徴的なのが山陽染工(福山市)の独自技法「段落ち抜染(ばっせん)」だ。強度の異なる3〜4種類の薬剤で染料の抜け具合を変え、柄を表現。濃いネイビーと薄いネイビーの差で花びらを浮かび上がら

デニムのネクタイ

(広島県福山市)

せている。バラは福山市の花だ。
布の上に柄をプリントするの比べて生地表面が柔らかいままで、肌触りが良い。離れて見ると通常のネクタイとほとんど変わらないが、近づくと柄があるのが分かる。幅広い色のシャツに合い、仕事でも使いやすい。デニムは固いイメージがあるが、綿の糸にセルロース繊維を混合。長く着けても疲れにくい、柔らかい着用感にした。デザインや全体の監修はセレクトショップ「パリゴ」を運営するアクセ(広島県尾道市)が手がけた。開発を担当した内



一般的なデニム製品に比べ、触り心地は柔らかい

広島

濃淡の差でバラ柄表現

山直昭氏は「普段ジーンズをはかない人にも手に取ってもらい、福山をデニムの産地としてPRしたい」と話す。1万円以上の寄付で送っており、2020年度には50件弱の寄付が集まった。

埋め立て地の多い福山は江戸時代に綿花の栽培が進み、伝統織物「備後緋(がすり)」で栄えた。戦後に洋装化が進むと各社は技術をデニムに応用し、生き残った。ジーンズの産地としては近隣の岡山県倉敷市が有名だが、福山は素材産業のため陰に隠れていた。

福山市の17年の調査では、首都圏に住む人のうち福山を知っているのは3割にとどまった。広島県内の第2都市で人口46万人、新幹線「のぞみ」も停車することを考えると寂しい。せつかくの伝統産業を生かして知名度を上げようと、同市は16年から「デニムのまち」としてアピールに注力。ふるさと納税も好機と捉えている。

(河野真央)